

福島大学附属図書館報

書 燈



No.34 2005.4.1発行

〒960-1293 福島市金谷川1番地

TEL (024) 548-8083

<http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/>

携帯電話版

<http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/i.htm>

福島大学附属図書館

《今野源八郎旧蔵書》覚書

—「目録」完成の節目にあたって—

名誉教授・前学長 吉原 泰助

1995年9月末、福島大学で東北経済学会が開かれた。その宵、金谷川キャンパスであった懇親会の席で、今野源八郎先生が弘前大学の某教授に、「僕の蔵書を弘前に寄贈したいのだが、どうだろう」と話しかけられた。某教授の答えは、「弘前は受入れ態勢が十分でないから、お止めになったほうが宜しいと思います」という、にべもないものであった。横でこのやり取りを耳にした僕は、咄嗟に「先生、宜しければ、福島大学が頂戴しましょう」と口を挟んだ。これが発端である。

もちろん、ただ闇雲に申し出たわけではない。今野先生の蔵書は、ご専門ご経歴からして、きっと貴重なものに違いないと確信したからである。また、確かに、先生と弘前大学とは、その前身＝旧制弘前高校が先生の母校であり、先生が東大を定年退官後5年ほど弘前大学の人文学部で教鞭をとられた——おそらく東北経済学会の会員となられたのはその頃のことであろう——という絆がある。とはいえ、相馬の八幡村(現相馬市)に生まれ、八幡尋常小学校・旧制相馬中学を卒業されただけでなく、現に相馬市の名誉市民でもある今野先生には、福島大学と縁がなくはない、という想いが後景にあった。

今野先生は、その場で即座に快諾された。その夜、飯坂の宿まで、下平尾勲教授に頼んで先生を送ってもらったのだが、先生は下平尾教授を部屋まで招じ上げ、遅くまで歓談されたという。故郷の大学に蔵書が入ることが、よほど嬉しく、安堵もされたのであろう。

先生は、福島大学との約束を果たすべく、間を置かず、蔵書の整理、目録の作成に取りかかられた。だが、こと半ばで、翌秋11月、一年前あんなにもお元気だった先生は、忽然と鬼籍に入られてしまった。その師走、附属図書館の渡辺義夫館長と職員が、九段の道路経済研究所ならびに葉山のご自宅に伺い、大量の書籍・資料の受入れ作業が滞りついた。さらに、渡辺館長は相馬での先生の納骨式にも参

列、相馬のご実家にあった書籍をも頂戴した。三箇所から送られたダンボール数は延べ528函にも達する。この受入れを先頭に立って牽引した渡辺教授は、館長退任数カ月後、不幸にも金谷川駅前で交通事故に遭われた。渡辺教授の人生最後の大事な仕事、今野先生の蔵書の受入れであったのかもしれない。

この時期、今野先生の旧蔵書に加うるに、大塚久雄先生の旧蔵書ならびに福島高商の卒業生でかつて千葉商科大学におられた芳賀守先生の蔵書の受入れが、同時進行していた。これら三つの蔵書だけで本学図書館の通常の年間受入れ冊数の何倍にもなるという。

学長として、余分な業務の人件費など整理＝目録化の諸経費を工面せよと命じられた。色々やり繰り算段したあげく、最後に残ったのが、今野先生の龐大な和洋資料である。そして、《これは、特にお前が引き取ったものだから、責任をもって財源を探してこい》、ということになった。なにしろ創立50周年の学術振興基金を集めている最中である。千万単位と目される資金を別途調達することは至難と予想されたが、とにかく、友人たちの間に伝手を求めて、今野先生に恩義のある機関・団体等に当たってみることにした。

先生のご専門である交通論から、まず短絡的に思いついたのが、運輸省である。運輸省の審議官や局長を歴任し、当時東京都地下鉄建設株式会社の社長として大江戸線の建設工事を手掛けていた熊代健氏(故人)に相談した。熊代氏は古巣を駆けめぐり、外郭の笹川財団や海図協会にまで手を廻してくれた。だが、結論は、今野先生の主たる守備範囲は道路で、むしろ建設省の縄張りに属するというものであった。後年、国土交通省となるのだから滑稽といえなくもないが、当時の縦割り行政の規範からは、そうなるらしい。

ところで、この熊代氏の示唆は大変役に立った。その直後、福島のある会合で、建設省の福島工事事務所長の広木謙三氏

(2)

と同席する機会があった。酒の勢いもあって、「審議会の会長をあれほど頼んで、今野先生にはお世話になったのだから、建設省がこの蔵書にかかわってもよいでしょう」と談じ込むと、「やってみましょう」と脈のある反応が返ってきた。大学に戻って、同氏と面識のあった鈴木浩教授に詰めを依頼すると、快く引き受けてくれた。広木氏は本省と協議、建設省が必要に応じて資料を利用できるという条件付きで、同省が審議会資料等の和資料の整理＝データ・ベース化を肩代わりしてくれることになった。そして、福島工事事務所は、歴代所長の引き継ぎ事項として、この約束を果たしてくれた。

他方なお、洋資料の山が未整理で残った。丁度そのころ、新日鉄の副社長や新日鉄商事の会長を経て当時日本銀行の政策委員をしていた三木利夫氏を、学術振興基金の募金キャンペーンを兼ね、金融機関向けの50周年記念講演に招いた。その折、三木氏が日本道路公団の顧問をしていることを思い出し、この件の公団への橋渡しを依頼した。三木氏の根回しもあってか、紹介され面会した道路公団総務担当理事の奥山裕司氏は、「私どもの公団は今野先生がお創りになられたようなものです」と、二つ返事で高速道路調査会

に話を通してくれた。調査会からは何人かの方が来福、今野先生の蔵書の現物を確かめ、工事事務所の前例を調べた上で、残る洋資料の整理＝データ・ベース化を全面的に引き受けてくれた。かくて、自前整理の図書・雑誌と併せ、《今野旧蔵書》全体の目録化に目処がたった。

いま、『目録』を手にすると、今野コレクションの中身の濃さに圧倒される。あらためて、今野源八郎先生ならびに御遺族の皆様には、深甚なる感謝の意を表したい。

なお、余録ながら、生前、渡辺義夫館長が福島市の民家園に移そうと奔走された相馬の旧今野邸は、このたび、縁あってアメリカ・マサチューセッツ州の中高一貫校のキャンパスに寄贈・移築されるという。ご生家が、若き日、新渡戸稲造氏に随行して渡航した憧れの地に復元され、日本文化学習の教材として活用されるとは、今野先生も、さぞかし、お喜びのことであろう。

図書館の求めに応じ、『目録』刊行を機に、私が関わった範囲で、上来の顛末を書き留めておく。最後に、紙幅の都合もあってお名前を挙げえなかった方々を含め、この間、《今野旧蔵書》の受入れ・整理＝目録化にご尽力下さった多くの皆さんに、心から感謝し、筆を擱く。

思い出の一冊 『関口・初等ドイツ語講座』上・中・下、三修社、1956年初版

衛藤安治

関口存男(1894-1958)のこの著書を買って求めたのは学生時代のことである。一般教育の教科書として指定されていたからである。もう三十数年も前のことになるが、これまで何度か読み直してみることがあった。だから「思い出の一冊」と言うより、「ずっと気になっている一冊」と言った方が適切かも知れない。

ずっと気になっている理由は、自分のドイツ語が初等の域を脱することがついになかったということと、初等文法の習得にはこの本以外に良書はないと堅く信じているからである。著者も言うように、この本は「一冊物の入門書」とは違う。いわゆるアンチョコではない。また「百貨店式のにぎやかな講座」でもない。この講座は文法の基礎を系統的に、そして徹底的に教えるという禁欲的な姿勢を貫いている。さらに使用語彙を極端に制限して、学習者が文法の習得に専念できるように工夫されている。要するに、「どんなに重い飛行機でも離陸できる平らでまっすぐな滑走路」のような入門講座である、と著者は言っている。とは言え、この講座を読んで、ドイツ語会話ができるようには絶対にならない。しかし、辞書を片手にひとつつ文章でも読んでみようか、という気にはさせられる本である。入門書



のこのようなあり方は、知育としての語学教育の根幹を支えるものとして尊重されねばならないであろう。

この講座は「文法の本路」なので「単純な例文ばかり」の退屈な本だと著者は謙遜している。しかしこの本には、関口存男一流の大人の退屈させない辛口アフォリズムが随所にちりばめられているのである。制限された語彙のなか

でこのような芸当をやったのける関口文法に読者は驚かされる。再読、再々読に堪えられる本になっているのは、この名人芸に出会う楽しみがあるからかも知れない。

先生の著書はおおかた既に絶版となっているので、その偉大さは今となっては分かりにくい。それで、その偉大さを雄弁に物語るエピソードを一つだけ紹介しておきたい。先生の著書に『(意味形態を中心とする) 独逸語前置詞の研究』という1943年に出版された本がある。これは

何年前かにヨーロッパの言語学者らによって再評価され、独訳版がドイツで出版されている。関口存男が独創的な言語学者として、今でも忘れられていないことを示すうれしい証拠である。

(人間発達文化学類 教授)

ドイツ・大学附属図書館の散策

行政政策学類 助教授 下山 憲 治

ドイツの大学附属図書館をUB（ウー・ペー）とよぶ。ドイツに行くたびに利用するボン大学のUBは、ライン川に面しており、図書館内から対岸の教会や河川敷、街並みがみえる。もちろん、河川交通の元祖のようなところなの



で、いろんな国籍の船が河道内を、ゆったりと、航行しているのがみえる。また、一定の時間になると、教会の鐘がなり、朝だ、おきょうとか、お昼ご飯だ、仕事は終わり、とか、生活リズムの中に組み込まれてくる。

UBには、福島大学附属図書館のような「新しい図書館」もあるし、歴史ある大学には「古い図書館」もある。「新しい図書館」は、たとえば、エアフルト大学のように新しい大学で、一般的な本も、各専門分野の本も集中管理され、「枝葉のない」図書館を意味している。他方で、「古い図書館」、日本の比較的大規模大学で見られるような「枝葉のある」図書館もある。それぞれ良し悪しがあって、「新しい図書館」では、そこで、貸し出しやコピー、相互貸借などのすべての手続きが終わるわけだが、重要な本はすでに貸し出されていてすぐに使えないなどの「余裕のなさ」がある。「古い図書館」は、研究所・研究室の近くに図書室があって、教職員や、講座所属の学生が、いつでも新しい雑誌や本を見ることができ、コピーもできる。ただ、いかんせん、収蔵数に限界があるから、他の図書室や図書館に行かなければならなくなることも少なくない。このような図書室でも、「当然のこと」ながら日曜・休日に人を見かけることはまずなかった。カーニバルのメッカ、ライン川周辺でも、ボンやケルンでは、カーニバルのクライマックス、ローゼンモンターク（バラの月曜日）の前後では、休館、もちろん、図書館だけではなく、講義も大学業務もすべて休みになる。

ドイツのUBでは、すべての蔵書・雑誌が開架式で、自

分ですぐに中身を見ることができる「利用型UB」のところが多く、しかも、閲覧やコピーだけなら利用証（利用者カード。有効期間は一年間。利用証の再発行は有料となる。）も不要である。でも、大半の蔵書が開架式のところもあり、そういう「管理型UB」では、ほしい文献を注文して、1時間とか、待たされることもざらであるし、利用証がなければ注文もできず、ほとんど有意義な利用ができない。だから、私も、4枚の利用証を持っていて、いくたびに更新している。



相互貸借は、ドイツでも、ネットワークを通じて、利用者が国内の図書館にある書籍を、2週間で、一冊につき1.5ユーロ（約200円）で借り出せる。館内の机にはLANにつなげることができる場所もあり、蔵書検索が持込パソコンでできる。もちろん（?）、図書検索等以外にはできないように設定されている。

さらに、法曹養成のため、国家試験（司法試験）科目関連の教科書や雑誌が、所狭しと開架されている。だから、同じものが10冊以上並んでいる場合もあるし、ボロボロで「あじ」のあるものもある。ボン大学のこの種の図書館（ユリディウム）は、平日8時から23時まで、土曜日は18時まで開いていて、学生や市民は自由に利用できるが、本を借りることはできない。

私の研究場所の図書室では、窓越しに、大きな木が数本見え、その木に巣を作っているリスがエサをあつめたり、毛づくろいをしたり、いろんなしぐさがみえた。こんな、おらかな雰囲気の中で、ゆっくり一つのテーマをじっくり考え込んでいけるのは、とても幸福なことだと思う。さて、今の日本ではどうだろうか？

こんなものがあったのか!! ~たくさんの“さようなら”をご賞味あれ~

教育学研究科 2年 淨 沼 智佳子
教育学研究科 1年 堀 口 恵利子



『くさようなら』の事典』

大修館書店1989.5
窪田般彌、中村邦生 編著
(請求番号R908.8/Ku14s)

4月は出会いの季節、その裏にはたくさんの別れもあった事と思います。慣れた土地とのさ

ようなら、友人とのさようなら、恋人とのさようなら…。皆さんは今までにどんな“さようなら”を経験しましたか？

今回ご紹介した本は映画や小説、著名人の様々な別れや終わりの場面での“さようなら”の言葉が記されている一冊です。それぞれの言葉の後に解説がついているので言葉の背景など、それまでその人物や小説などを知らなくてもどんな状況でその言葉が生まれたのかが分かります。

本の名前には事典とついていますが、1つ1つの言葉に物語があるので、短編小説をいくつも読んでいるような感覚で読める本です。ここで、本書に掲載されていた素敵な

さようならの言葉の一つを紹介します。『すぎゆく人よ、わが死に涙をそそぐな。もし私が生きていれば、君は死ぬだろう。』こんな事を言ってもらえる幸せな人が実在したなんて！中には、私にはまだまだ理解不可能な深い言葉もたくさんありました。これからの生活の中でどんな人に出会い、どんな別れがあるのでしょうか。出会えたのも何かの縁、素敵なさようならができるように精一杯友人、家族、そして自分との時間を大切にしていこう。

この事典でいろいろなさようならに出会い、これまでの自分のさようならを思い返してみたいかですか？

最後に、今回この文章を書かせていただくにあたり、OPACを使い本の検索をしました。図書館にはまだまだ面白そうな本がたくさん所蔵されています。まさにこんなものがあったのか!!の連続でした。皆さんも自分の一冊を見つけてみてはいかがでしょうか？

「図書館は何階建てだか知っていますか？」

—カウンターの内側から—

銭 谷 一 平

正面からお越しの方には「2階建て」というイメージが強いでしょうね。それも間違いではないのですが、正解は「地上2階・地下1階建て」です。金谷川駅の方角から見るとフロアが3つあるのがわかります。

では、みなさんが気づかないところには何があるのか?? 地下の北側は書庫になっていて、新聞や洋雑誌などがあります。そして、南側には事務室や館長室など(シャワー室なんてところもあります・笑)があるのです。

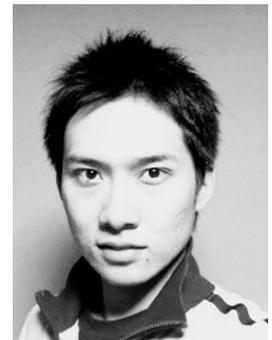
そう、『みなさんが普段意識していないところ』で職員さんは働いているのです!

ところで、みなさんはパソコンで本を探し、書かれている番号の棚に行き、本を見つけ、カウンター(もしくは機械)で借りる。ということをしたことがあると思います。しかし、もし本を探すパソコンがなく、本があっちこっちバラバラで置かれているなんていう図書館だったらどうでしょう??

こういった使いづらさをなくすために、図書館の職員さんは本を買ったらデータを打ち込み、決められたルールで本を並べ、自館にない場合には他館と連携!という仕事を

しているわけです。しかし、福大図書館にはおよそ【78万冊(!?)】もの図書・資料があるというからこの作業は容易なことではありません。それでも、みなさんがより便利に図書館を利用できるように、日々地下のフロアやカウンターの奥など、『みなさんが普段意識していないところ』で、みなさんが普段意識していない仕事に精を出して働いていらっしゃるのです。

それでも、まだまだ改善されなければいけないところもありますし、職員さんも気づかない利用者側の不満というものもあるでしょうから、福大図書館をもっと良いものにするために、感じたことがあればカウンターに来てどんどん話してくださいね。



学内教官著作寄贈図書の紹介



『大型店立地と商店街再構築—地方都市中心市街地の再生に向けて—』
八朔社 2004.7
山川充夫 著(理事・副学長)

福島市の中心市街地の商業は、活性化へのさまざまな努力が積み重ねられているにもかかわらず、

さくら野百貨店が撤退を表明したように、サティのような郊外型大型店と仙台市の中心商店街との狭間にあって、苦戦をしいられている。ただし大型店ととも、二強といわれるイトーヨーカ堂とイオンが大店立地法のもと全国レベルでしのぎを削っているが、ウォルマート傘下に入った西友やイオンに吸収されたマイカル、企業再生処理機構の軍

門に下ったダイエーなど、S&Bの経営戦略を間違えると、大企業といえども破綻への途をたどることになる。

商店街には持続的発展の展望はないのかといえば、会津若松市七日町商店街や山形県高島町中央通り商店街のように、事例は少ないものの確かにある。商店街を抱える中心市街地の再構築は、足元にある生活履歴としての歴史的資産を見直し、商業者自身が地域社会とともに歩むという覚悟を決め、まちづくり会社(TMO)の担い手を育成して、定住に視点をおいた地域再生戦略を立てることで動き始める。再生への途は決して平坦ではない。しかし本書からその再生へのきっかけを少しでも読み取ってもらえれば、著者としては望外の喜びである。

(文：山川充夫 所在：学内刊行物コーナー 請求番号672.9/Y27 o)



『どの子どものびる運動神経』
かがわ出版 2003.8
白石 豊(人間発達文化学類教授)
川本和久(人間発達文化学類教授)
ほか 著

「運動神経は遺伝ではない」これが本書の一貫したテーマである。つまり、適切な時期に適切な環境と運動刺激が与えられさえすれば、いろいろな運動をだれでも身につけることができるのである。

ところが残念なことに、現在の日本では、遊技内容の変容や遊びの室内化などの現象により、運動の発達にとって適切な環境が少なくなっている。そのため、子どもた

ちの体格は飛躍的に良くなった一方で、運動能力は低下の一途をたどっている。こうした問題に歯止めをかけ、子どもたちの運動神経を効率良く高めていくためには、それぞれの時期に見あった、最も適切な運動刺激を与えていく必要があろう。

運動神経を良くするチャンスは一生に三度あるとされているが、なかでも幼少期における運動神経の発達には、目を見はるものがあることが明らかにされている。

本書では運動発達のゴールデンエイジを迎える小学生年代を中心に、運動神経にまつわる話や運動を指導する際のポイントなどに加え、運動神経を飛躍的に向上させるためのドリルを、図や映像を交えわかりやすく説明した。

(文：白石豊 所在：学内刊行物コーナー 請求番号375.49/Sh82 d/1)



『21世紀世界経済の展望』
八朔社 2004.3
福島大学国際経済研究会 編

本書は、旧経済学部関係スタッフが中心となって、本学地域創造支援センターの登録研究会として国際経済研究会を発足させ、

合宿を含む研究会活動を継続して取り組み、その成果としてまとめあげたものである。各章は、執筆者独自の問題関心に沿って書かれた独立した論文ではあるが、アメリカ、ヨーロッパ、アジアの各地域に属する経済を取り上げて分析し、最後に現代の国際経済を理論的に総括し、一書

に構成する工夫も施されている。本書が念頭に置いている現実には、ドル危機、冷戦構造崩壊とグローバリゼーション、ヨーロッパ経済統合、アジア経済の台頭と通貨危機、日米経済摩擦などであり、理論的には『資本論』や『帝国主義論』に関する議論が念頭に置かれている。この現実には高度に複雑で巨大で圧倒的であり、これに立ち向かうわれわれの理論的武器は、まことに貧弱と言わざるを得ない現状である。現実の変化のスピードが異常なほど加速していることがその理由の一つとしてあげられる。こうした現実と研究状況に対して、困難ではあるが挑戦する価値は大いにありと考えると、執筆に取り組んだ。

(文：十河利明 所在：学内刊行物コーナー 請求番号333.6/F84 n)

利用者アンケートの結果について

～「日曜開館」と「シラバス参考図書コーナー」に関するアンケート～

情報サービス係

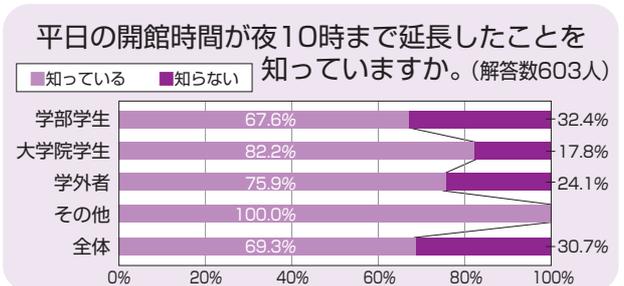
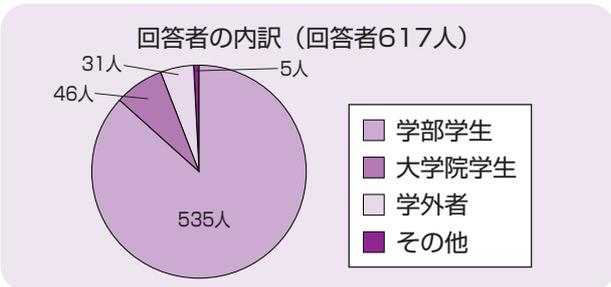
このアンケート（実施期間：平成16年12月6日～24日）は昨年10月から試行として実施してきた「日曜開館及び平日の開館時間の延長」と4月に設置した「シラバス参考図書コーナー」に関して、利用者からの意見を伺い、今後の改善に役立てるために行ったものです。今回お知らせする結果は、学生用（学外者も含む）・教員用の2種類のうち学生用のものです。寄せられた様々なご意見・ご要望につきましては、今後改善に向けて検討する予定です。ご協力いただきました皆さんに感謝いたします。

日曜日の開館については、84.3%が「満足」または「ふつう」と答え、「不満」は15.7%ある。全体としては良好な評価といえるが、平日、土曜日開館の満足度に比べ「不満」の割合が多いことは留意すべきである。「不満」の中味のほとんどは開館時間が短いことを挙げ、夜間までの延長希望が多い。

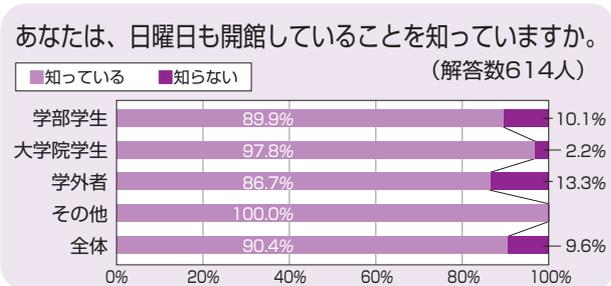
回答者数 617人（学部学生 535人、大学院学生 46人、学外者31人、その他5人）
回収率 学部学生 約12%、大学院学生 約23%

【不満】

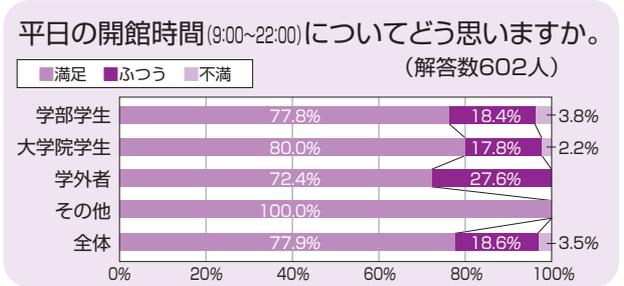
- ・もっと遅くまでやってほしい。開館時間が短い。(81人)
- ・開館時間を早く。(6人)



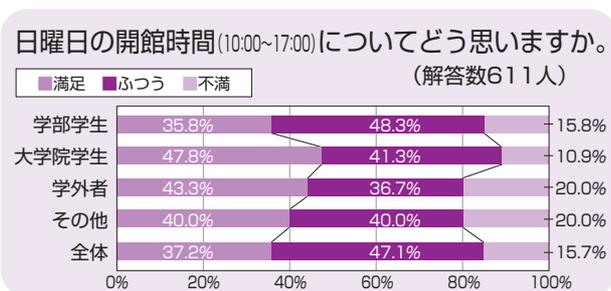
認知度は、70%にとどまり、まだ知らない利用者が30.7%存在する。他の身分に比べ学部学生にその割合が高い。



全体の90%以上の利用者が「知っている」と答えており、広く利用者に浸透してきている。



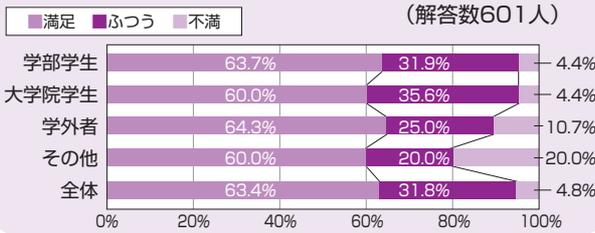
77.9%が「満足」と答え、「ふつう」と合わせると96.5%になる。わずかな不満層の意見を見ると、「朝の開館時刻を早めて欲しい」意見と、「夜の電車時間との不適合」（閉館時刻と10時台の電車時間が合わない）の指摘が目立つ。



【不満】

- ・朝もう少し早く開館してほしい。(6人)
- ・開館時間をのばしてほしい。(5人)
- ・電車の時間が閉館時間と合っていない。(4人)

土曜日の開館時間についてどう思いますか。

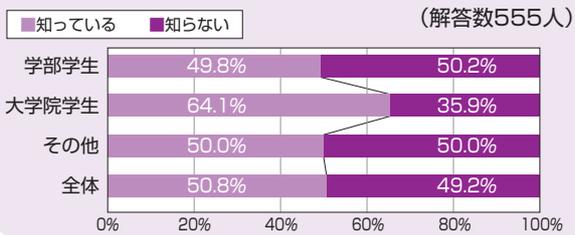


満足度が高く、「満足」63.4%、「ふつう」31.8%となっており、「不満」は5%に満たない。意見の中では、9時開館を望む声が多い。

【不満】

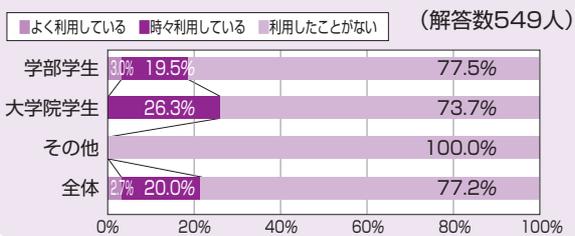
- ・朝もう少し早く開館してほしい。(12人)
- ・開館時間をもっと長く。(13人)

シラバス参考図書コーナーがあることを知っていますか。



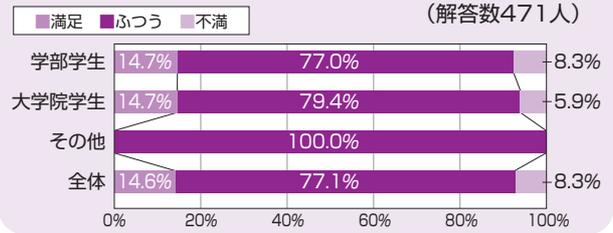
コーナーの存在を知っている学生と知らない学生が半々であり、認知度がかなり低い。

シラバス参考図書コーナーをどの程度利用していますか。



利用についても「良く利用している」が3%に満たなく、「時々」(20%)と合わせても、利用経験者は、4人に1人以下である。

このコーナーについてどう思いますか。



満足度については、「ふつう」が77.1%と、他の選択肢にくらべ割合が高い。利用経験がないために評価すること自体が困難であるという現状が見える。この他に無回答が146人(回答者の24%)存在する。「不満」は8.3%と低い数字であるが、内容としては、貸出不可であることへの不満が多い。

【不満】

- ・貸出をしてほしい。(13人)
- ・少ない、冊数が少ない。(6人)
- ・知らない、よく分からない。(15人)
- ・本が探しにくい。(1人)

【自由記述】(主なもの)

- 日曜開館
 - ・日曜開館しているととても便利です。
 - ・もう少し遅くまで開館してほしい。
- 平日の開館時間
 - ・遅くまであいているので助かります。
 - ・朝もう少し早く開いてくれるとなお満足。
 - ・できれば電車の時間に合わせてほしい。
- 土曜日の開館時間
 - ・とても便利です。今後もつづけてください。
 - ・できれば22:00までにしてほしい。
 - ・9:00から開けてほしい。
- シラバス参考図書コーナーについて
 - ・便利だと思う。
 - ・今まで知らなかったが、今後は活用したい。
 - ・貸出できるようにしてほしい。
 - ・もっとアピールしてほしい。
- その他
 - ・温度管理があまり良くない。
 - ・閲覧席に電気スタンドを設置してほしい。
 - ・現金でできるコピー機がほしい。
 - ・紙コップの自販機をおいてほしい。
 - ・PCの数を増やしてほしい。
 - ・専門図書を充実させてほしい。
 - ・雑誌を強化してほしい。

その他たくさんのご要望をいただきました。全体の集計結果については、ホームページに掲載する予定です。

図書館ホームページ [携帯電話版] のご案内

学術情報係



図書館に来てみたらまだ開館していなかった、休館日だった…そんな経験はありませんか？携帯電話から <http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/i.htm> に接続すれば、図書館の開館時間や休館日などを確認することができます。図書館ホームページ[携帯電話版]からご利用いただけるコンテンツは次のとおりです。

- お知らせ
- 開館時間
- 休館日情報
- 問合せ先一覧
- 一般市民の利用案内
- 交通案内

一部の機種については、メール機能などに不具合が生じる場合があります。[携帯電話版]へのご意見、ご要望は学術情報係までお寄せください。

福島大学サテライト「街なかランチ」におけるサービスについて

情報サービス係

図書館では、昨年開設された「街なかランチ」において、4月より次のサービスを開始する予定です。どうぞご利用ください。

図書館資料の配置

◇シラバス掲載参考図書、各種事典、辞書類を備え付けます。

本館資料の利用

◇金谷川地区の本館で所蔵している図書について、貸出申込み、受取り、返却ができます。

◇本館で貸出手続きをした図書についても、「街なかランチ」で返却することができます。

学外者の利用申込

◇初めて図書館を利用する学外者が図書館利用申込み、利用証の発行申込みと受取りができます。前述の貸出申込み等の利用もできます。

目次

- 《今野源八郎旧蔵書》覚書 — 『目録』完成の節目にあたって— ……………吉原 泰助 (1)
- 思い出の一冊『関口・初等ドイツ語講座』 ……………衛藤 安治 (2)
- ドイツ・大学附属図書館の散策 ……………下山 憲治 (3)
- こんなものがあったのか!!～たくさんの“さようなら”をご賞味あれ～ ……………浄沼智佳子、堀口恵利子 (4)
- 「図書館は何階建てだか知っていますか？」—カウンターの内側から— ……………銭谷 一平 (4)
- 学内教官著作寄贈図書の紹介
『大型店立地と商店街再構築—地方都市中心市街地の再生に向けて—』……………山川 充夫 (5)
『どの子どものびる運動神経』……………白石 豊 (5)
『21世紀世界経済の展望』……………十河 利明 (5)
- 利用者アンケートの結果について～「日曜開館」と「シラバス参考図書コーナー」に関するアンケート～
……………情報サービス係 (6)
- 図書館ホームページ [携帯電話版] のご案内 ……………学術情報係 (8)
- 福島大学サテライト「街なかランチ」におけるサービスについて ……………情報サービス係 (8)